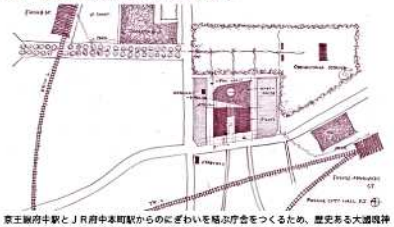
■府中市新庁舎建設基本・実施設計委託に関する公募型プロポーザル

府中の文化や自然を育み、市民がともに創りあげる「府中のミライ」

■市民が誇りを持ち、まちの歴史、まちの自然、まちの魅力を発信する

00 まち・人の流れを引き込み、結ぶ

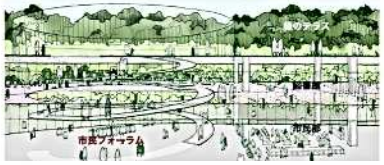


京王線府中駅とＪＲ府中本町駅からのにぎわいを結ぶ庁舎をつくるため、歴史ある大國魂神社参道と芸術の府中街道の賑並みの、双方からの人の流れを引き合わせます。東側と北側住宅に対しては庁舎を低層とし、神社の深い緑に溶け込ませます。西の表側には庁舎の顔を作り出し、豊の日差しや大樹を遮る大きな軒下の空間が生まれます。長く市民に親しまれているこの場所が、庁舎内外のスペースを合わせた、新しい「市民の広場」に生まれ変わります。日常的に市民がこの空間に集い、やすらぎ、この場所を誇りに思って、まちの歴史、文化、自然など、まちの魅力を再発見し、発信したくなるような「広場」を提案します。

■市民と行政との協働を支え、まちづくりとの連携を図る

01 市民サービスの未来を見据えた新世代の庁舎

将来は、各種申請や証明書を取りに役所窓口に出向くことは減り、まちづくりや福祉など様々な行政サービスを市民が質代わりする場面が増え、市役所は、そのまま「市民活動の拠点」となると思われます。当面、後地階や低層階には市民に関わりの深い部署や窓口が集約的に配置しますが、併設される図書館や市民フォーラムと共に、いずれはアクセスのよいオープンスペースとして全面改装できるよう、ゆとりある柱配置と天井が高く単純な空間を構成します。



■高い自立性を備えた、地域の安全・防災・災害復興の拠点

02 防災拠点としても機能する市民活動スペース

東日本大震災を契機として見直された新たな地域防災計画に基づき、府中駅−府中本町駅の間に新設する安全な避難場所として、屋内外の「広場空間」を活用します。庁舎建物を震度6弱強1.5倍の免震SRC構造とするほか、日頃は賑いの場として、また共に触れて多様な市民活動の場として開放される吹抜けロビーの「市民プラザ」、日中は市役所ロビーとして、また市民活動のデモンストレーションの場でもある「アトリウム」や「市民フォーラム」、大國魂神社に面する「緑の広場」、低層部３階屋上の「緑のテラス」などのすべてが、緊急時には避難場所、災害復興拠点として機能します。

■立地や景観を活かし、環境に配慮してライフサイクルコストを低減する

03 水と緑、光と風を採り入れて、LCCを快適にセーブする

立地環境を活かして、循環型の自然エネルギーの活用を心がけ、“我慢するのではない”快適な省エネルギー法によって、施設全体のライフサイクルコストを縮減します。庁舎棟では西側は比較的閉じて西日を遮り、南北面の採光面では自然換気、ライトシェルフによる日射制御などを行って執務環境を快適化するほか、各階を斜めにつなぐ「光と風のボイド」によって濃度希換気や夜間のナイトパージ、執務ゾーンへの柔らかな自然採光などを計画します。西側の大ピロティ下には薄い水盤を張って、夏には子供たちの遊べる快適な水辺空間とします。水盤が周囲の環境を冷やすだけでなく、光を反射して明るい軒下空間を作り出します。執務は放射空調を中心に行うことで、光と風が抜ける広い空間でも空調効率を落とすことなく快適な環境を保ちます。議場棟や市民棟は、隣地側に配慮して緑でくるんだ低層棟とし、強力エレベーターを使わないで済むよう計画します。中央のアトリウムを通して自然採光、自然換気を行い、隣接する緑の景観を取り込んで快適で賑いのある室内環境をつくります。庁舎全体が、大地震などの発災時でも、できるだけ備蓄エネルギーを消費しないで済む計画です。

■業務面に支障の少ない効率的な建替計画

04 立地や敷地の制約を有効に活かす

一期目の工事では、現庁舎を使用しながら北側余白部に低層の議場棟を建て、仮庁舎には現市庁舎の各部などを移転します。二期目では西庁舎を解体後に庁舎棟を建設し、現東・北庁舎の各機能を移転。三期目に東側敷地に市民利用スペース、図書館・資料館などを建設、一階に市民部を可配置します。これにより行政・議会機能を支障なく継続しながら、仮庁舎を一切使わずに、予定工期内での建て替えを完了できます。

■安全で将来の変化にも柔軟に対応できる構造計画

05 大らかな空間を生む、堅牢で合理的な骨格

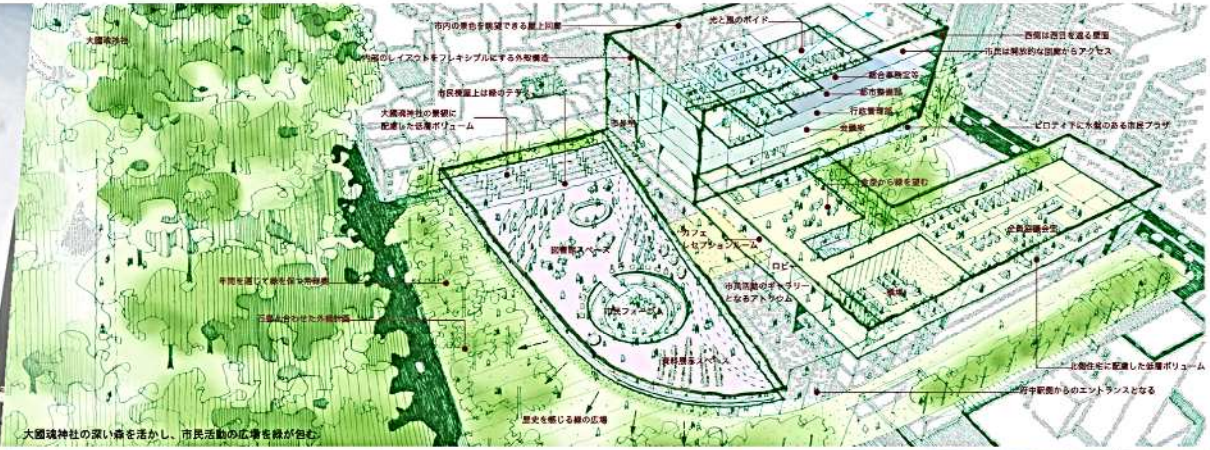
近い将来に予想される大地震発生を考慮して、施設全体を地下駐車場階の柱併免震による一体化した免震構造とし、配置を工夫して免震装置の数を減らすことで、省コスト化を図ります。水盤関係を除く主要な設備機械は、すべて免震上に置いて発災時のBCPを確保します。地上棟では将来の空間可変性を容易にするため、柱スパンを比較的大きめに取り、また外壁をそのまま耐震性の高い構造骨格とすることで、内部空間の効率を高めます。市民プラザのある庁舎棟ピロティ部は、梁上階の機械室階に設置する大トラスからの吊り下げ構造として、低柱密間を生み出します。

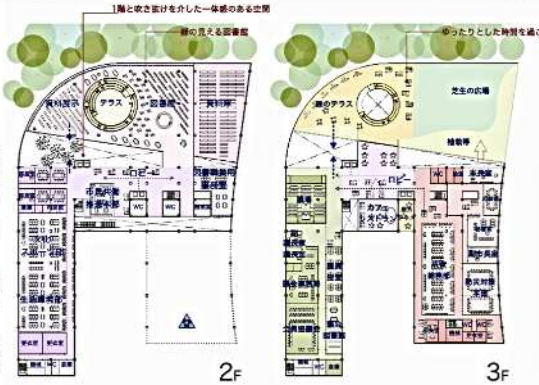
■緑やかで無駄のない“光”と“祈り”の計画

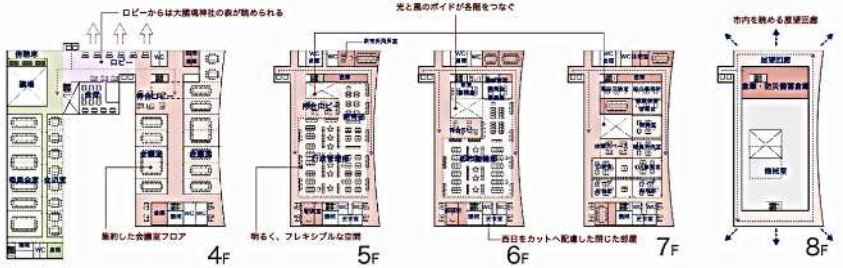
06 周辺環境への光や風の影響を最小限に抑える建築ボリューム

平面の大きい建築の形状は光や風へのアクセスが乏り、屋内は閉塞感のある空間となります。また平面形を小さくして高層化すると景観や周辺の風環境への影響が心配されます。本計画ではコの字型の間に生まれるバッファー空間をうまく活用して彩光・通風を確保しつつ、東西に正方形をもちえないボリュームとしています。

約8割外の市民利用が増えることを想定して、屋内外ともに夜間でも安全かつ安心な明かりの環境をつくります。また夜間点灯される屋内の照明を詳細に分析し、外構照明の一助とするほか、近隣への光害とならないように制御します。あわせて夜景が際やかで美しいものとなるようデザインします。







■設計中に始まり、建て替え中、そしてオープン後につながる市民参加

07 コミュニティプログラムとしてのアート計画

市民が自ら参加し「私たちの庁舎」の意識が持てるよう、新庁舎の様々な部分を市民とアーティストが協働して制作するワークショップを提案します。ピロティ部の市民プラザや、屋内の市民フォーラム、屋上の緑のテラスなど、各種のオープンスペースを活用し、マネジメントする事務局を、市民と行政の協力のもとに立ち上げ、市民活動の場としての新庁舎をサポートします。多くのアーティストやデザイナーの参画によって、工事中に始まり竣工後の継続的なアート制作やイベントの賞の充実を図り、市域を超えて緑のある地域や団体とも交流する、多摩地域における“芸道の国”の文化活動の核を築きましょう。

■市民と共に創りあげる本業務への取組体制

08 「デザイン・マネージメント・フォーラム」の提案

市民と行政、さらに多くの分野の専門家が協働して「府中のミライ」を創りあげるために、それらみんなが参画しアイディアを練り上げるワークショップのための「デザイン・マネージメント・フォーラム」の立ち上げを提案します。私たちが考える設計のチームには、建築家だけでなく、構造・設備の専門家はもとより、ランドスケープ、照明デザイン、市民協働のアートによるまちづくり、市民活動やパフォーマンス、コミュニケーション・デザインなど、これまでにも東京都内の大きな再開発を協働している多くのメンバーが加わっています。府中の新庁舎の計画にも、多くの市民と府中市の行政やまちづくりのアドバイザーの方々と共に、私たちもその能力を結集して役立ちたいと考えています。

051801